

曾祖父は命を捨てた

沖縄県立開邦中学校二年 馬屋原 颯介

僕の曾祖父は、第二次世界大戦の時に兵士として中国に送られた。聞いた話によると、ずっと満州に駐留していたが、ソ連軍が満州に入ってきたときに所属していた部隊がソ連軍と交戦した。曾祖父は銃を持っていたが、その銃の引き金は一回も引かれなかった。曾祖父は誰も殺さなかったのだ。

ソ連が満州に来てから間もなく、曾祖父はソ連軍の捕虜となり、シベリアに連れていかれた。中国語、ロシア語、英語ができ、絵も描けた曾祖父は、ソ連の将校に認められ、将校の家族の絵を描いたりしているうちに外を自由に散歩することが許可されたそうだった。散歩を許可された曾祖父は一日一日少しずつ散歩の時間を延ばしていき、逃げ道を探っていた。そして、遂に散歩に出たまま収容所には戻らず、逃げきって沖繩に戻ったそうだった。曾祖父がどうやって沖繩に到着したのか全容は聞いたことがないので、分からない。

曾祖父は戦争のことを僕には直接は語らなかった。他の人にもほとんど話していない。曾祖父が話した数少ない戦争体験を聞いたのは祖母だった。「話したくもない戦争」、それは曾祖父の心の傷が戦争が終わって七十年以上たっても消えないことを表していると思う。

祖母の話によると、曾祖父は、戦争で誰も殺していないことを心の支えに生きていたが、誰も殺せなかったことで友人が目の前で亡くなり、絶望を味わっていたそうだった。絶望が戦争の後も長く続いたエピソードの中でも強く印象に残っている話がある。曾祖父が戦争から帰って十年ほどたったころの話である。

彼は、娘と散歩に出た。沖繩の冬、少し肌寒い季節、二人は北中城の小道にある共同洗濯場を通りかかった。その時突然彼は上着を脱いで、シャツも、靴下も脱いで、

「こんな寒い時に、ごめんね、ごめんね」と地面に丁寧に服や靴下を並べてうずくまった。驚いた娘は、うずくまる彼の体をゆすって、

「どうしたの、どうしたの」と聞いた。しかし、彼は何も答えず、下着姿でふらふらと歩いて行ってしまった。娘は半べそで家に戻り母を呼んだ。母は娘の手を引いて洗濯

場まで行き、夫の脱いだシャツや靴下を拾い集めて胸に抱いて、彼を探しに歩き始めた。探しながら娘に、なぜ彼が服を脱いでしまうのかを教えた。娘は母の話聞いて理解し、それからは、水辺に行くと時々服を脱いでしまう彼の服を拾って後を追いかけていくようになった。

この「娘」というのは僕の祖母で、「その時颯介のひいおじいさんには、暗い森の中、水たまりの横で銃弾に倒れた友達が見えていて、その友達に自分の服や靴下を着せようとしていたんだよ。」と祖母が後から教えてくれた。この体験談を元に祖母の書いたエッセイを紹介する。「共同の古い水場に来た時、うっすらと人影が見えた。夢中で駆け寄った私たちが見たのは、服をすべて脱ぎ捨て、呆然と立つ父。寒くてかわいそうだよ、僕の服を彼に、靴も靴下も彼に……。暗闇に向かって指差し話す。申し訳ない、申し訳ない。僕だけが……」

曾祖父は誰も殺さなかった。だが、そのせいで曾祖父の友人は死んだと感じていた。自分の友人を救うために見ず知らずの他人を殺すか、人を殺さないで友人が死ぬのを見ているか、という二択だった。もし他人を殺せばその人の家族が悲しむし、殺さなければ自分が死ぬ。人生では複雑な選択がいくつも出てくる。しかし戦争は人から選択をうばい、命を天秤にかけさせる。友人か他人か自分か。「誰かを犠牲にして生き残るか、自分を犠牲にするか。」僕の曾祖父は後者を選んだ。曾祖父は自分が死ぬ思いで銃を撃たなかったんだと思う。しかし戦争は非情なもので、曾祖父が自分の命を捨てても守り抜こうとした命を次々に壊していった。個人の力には限界があるのだ。

今、ウクライナ・ロシア戦争が起きている。他国同士が団結すれば苦しい命の選択を迫られている人々を救うことができる。そのためにはまず自国第一主義をやめなければならぬ。しかしそれは簡単にできることではないし、すべての人がそれに賛成するとは限らない。

曾祖父はあまり怒らない人だったが、よく「いのちを大切にしろんだよ」と言っていた。命にかかわること以外は、何があってもいつも笑って僕を可愛がってくれた。世界中の人が本心に「いのちを大切にしろ」ことができれば、この世から戦争はなくなると思う。曾祖父はそれを自分の体験を元に伝えてくれた。戦争の最前線で自分のいのちを他人のために使うという決断ができた人だからこそ、そういう考えを貫けたんだと思う。今の世界中の人々の生活は曾祖父のような人々の犠牲の上に成り立っているということを忘れてはいけない。

今僕たちは、選択をせまられている。命の選択を日常の中でできるか、それとも戦争という非日常の中でするかは、世界中の人々の下す判断に左右されるだろう。